

三柱鳥居考

藤田 穂高[†]

The Study of Triangular Torii

Hodaka Fujita

1. はじめに

本稿は三柱鳥居について研究をおこなった修士論文に基づいている。三柱鳥居は全国各地に存在するが、様々な臆説が飛び交っておりこれが未だ何であるのか確たる説はない。この一風変わった表象の意味を考察することが本稿の目的である。研究の方法として、文献資料や考古資料、聞き取り等、様々な資料を用いた比較分析的なアプローチに加え、神話学における三品彰英の研究成果やジョルジュ・デュメジル、吉田敦彦、大林太良、平藤喜久子をはじめとする神話学者による三機能体系の研究成果を参考に表象の分析をおこなった。一つの論文において、様々な方法論を用いて迫るやり方はコンテクストの解明が浅くなり中途半端に陥る危険性もあるだろう。しかしそうしたリスクを承知しつつも敢えて比較という方法にこだわった。それはこうした方法が、従来の方法では解明されてこなかったモノ資料に対し新たな視点を提示すると考えたからである。

2. 三柱鳥居について

三柱鳥居とは三本の柱で構成された特殊な形状をした鳥居である。修士論文では日本に13例、北マリアナ諸島のロタ島に1例の計14例（これらの内、現存しないものが3例）があることを記したが、その後、国内に新たに2例存在することが判明した¹⁾。それぞれについては細かい点で様々なバリエーションが見られる。これらのほとんどは近現代に造られたもので、不明のものが1例あるものの、近世以前に遡ることが唯一確認できた例は京都府京都市太秦の木鳥社にある三柱鳥居のみであった。

各地に存在する三柱鳥居の事例は以下の通りである。

- ①京都市京都市 木鳥社 三柱鳥居 (図1)
- ②東京都墨田区 三囲神社 三角石鳥居
- ③京都府京都市 南禅寺大寧軒 三柱鳥居

- ④千葉県千葉市 稲毛海岸 海龍王祠の三柱鳥居 (現存せず)
- ⑤香川県高松市 宮處八幡宮 三柱鳥居
- ⑥長崎県長崎市 諏訪神社境内蛭子神社 三ツ鳥居 (現存せず)
- ⑦奈良県桜井市 大神教会 三柱鳥居 (別名、ムスビ鳥居・ヒフミ鳥居)
- ⑧岐阜県郡上市 (旧郡上郡大和町) 名称不明の山頂 大和三柱鳥居
- ⑨岐阜県関市 (旧武儀郡洞戸村) 丸山山頂 徳積三柱鳥居 (現存せず)
- ⑩徳島県西郡神山町 神山スキーランド内の稲飯神社 三ツ木組鳥居
- ⑪長崎県対馬市 和多都美神社 磯良恵比須と豊玉彦尊墳墓の三柱鳥居 (2基を1つと数える)
- ⑫アメリカ合衆国自治領北マリアナ諸島 ロタ島 三柱鳥居
- ⑬山梨県富士吉田市 不二阿祖山大神宮 三柱鳥居
- ⑭東京都新宿区 成子天神社境内水神社 三角形の鳥居

各事例の詳細については割愛するが、特に④の事例につ



図1 木鳥社の三柱鳥居 (筆者撮影)

[†] 2019年度修士 (人文学プログラム)

¹⁾ 岡山県美作市の極楽山阿彌陀寺に一基、和歌山県田辺市龍神村甲斐ノ川に一基存在する。

いて取材過程で新たに三柱鳥居の古写真を発見できたことは有意義なことであった(図2)²⁾。また現代において三柱鳥居は茶道の蓋置や、映画のセットなど様々な場面でモチーフとして採用されておりその表象の広がりを見ることができる。



図2 海龍王祠にかつて存在した三柱鳥居。奥側に見える。
(写真提供:「千葉市民ギャラリー・いなげ」の行木弥生氏)

3. 木鳥社の三柱鳥居

各地の事例を取材した結果、三柱鳥居の起源は木鳥社のものにある可能性が高いことがわかった。そこで本稿では木鳥社の三柱鳥居を研究することでその表象の起源と意味を探りたい。

木鳥社自体の起源について詳細は不明であったが、祭神を「天照御魂神」とする場合があることや、祈雨神としての記録があることから、その歴史をたどると祭神に日神と水神の両性格が見られることがわかる。筆者は特に伴信友の『神名帳考証』の記述に基づき対馬で信仰されていた太陽神の可能性のあることを重視した(伴1813)。

また木鳥社の存する森を「元糺の森」、境内にある三柱鳥居の建つ池を「元糺の池」と称し、夏の土用の丑の日に御手洗祭(足つけ神事)がおこなわれていることなどから、同様の神事がおこなわれている「糺の森」に祀られる鴨御祖神社や鴨河合神社と関係が深いことを指摘できる。さらに元糺の池が湧水地点であることや、2002年の境内の発掘調査で元糺の池以外にも境内北東部に平安時代中期の石敷遺構を伴った泉が発掘されていることもふまえ(京都市埋蔵文化財研究所2002)、木鳥社の性格に湧水信仰とそれに伴う禊の場といったものが見られることもわかる。

木鳥社の三柱鳥居は、花崗岩製の明神鳥居型³⁾で、笠木の断面が五角形、柱が八角柱であるところに特徴が見られ

る。こうした笠木や柱の特徴は内宮源鳥居に共通の様式である(後述)。現在、鳥居の南東側の柱には次のような銘が三行にわたり刻まれている。

山城国葛野郡式内木嶋再興神主日向守神服宗夷(筆者註:実際の「葛」は中が「ヒ」)

元糺太神降水本

天保二年辛卯十二月再興神主民部輔神服宗秀

これによると木鳥社の祭神が湧水の神とされており、現在の三柱鳥居が天保2年(1831)に建てられたものだということがわかる。

4. これまでの三柱鳥居の解釈

三柱鳥居についてはその起源や表象の意味について記録が存在しないことから様々な解釈がなされてきた。有名な説は景教と称されるネストリウス派キリスト教の遺跡とするものである。これは明治41年に佐伯好郎によって発表された「太秦(禹豆麻佐)を論ず」という論文に由来するものと一般的には考えられている⁴⁾。しかし実際にはこの論文で佐伯は景教や三柱鳥居については一言も触れていない。この論文では秦氏をユダヤ人であるとし、その痕跡としての太秦を取り上げているに過ぎない(佐伯1908)。おそらく佐伯が「景教博士」と呼ばれるほど景教の研究に寄与していたことと、この論文が相まって広がった話ではないかと思われる。景教が当時の唐に伝わったのは7世紀半ばとされており、秦氏が渡来したと思われる時期と大きくずれることから、この説は今では省みられることはほとんどない。

他にも木鳥社の祭祀に秦氏の関与があったと考えられることから、秦氏関連の他の神社との位置関係も踏まえて冬至の朝日、夕日を遥拝する装置であったとする解釈(大和1993)、平安京の場所の選定にともなって卜定がおこなわれたとする解釈(菅田2009)、江戸中期に木鳥社の復興にあたって呉服商の三井家が関与していることから三井家を象徴したものとする解釈(谷田2014)、さらにもっと合理的な解釈として単に中央の石積みの神座をいずれの角度からも拝せるようにしたものといった解釈や、水への信仰を表象したものなど様々な説が見られる(根岸1943, 津村1943, 山本1970)。

以上のようにこれまで三柱鳥居に対しては機能面にせよ象徴面にせよ、あまりにも多様な解釈がなされてきたものの、決定的な説は未だ存在しない。

²⁾ 千葉市立郷土博物館所蔵の戦前の絵葉書。観光用に作られたもので、現在、三柱鳥居の写っているものが3枚存在する。千葉市立郷土博物館の土屋雅人氏によるといずれも1918年(大正7年)から1933年(昭和8年)の間に発行されたものとのことである。

³⁾ 貫が柱の外に出ていないことなど他の多くの明神鳥居と異なる点もあるが、反りのある笠木の存在や、柱にわずかに転びが見られるなどの特徴から明神鳥居の一種と考えられる。

⁴⁾ 大和岩雄など(大和1993)。

5. 三柱鳥居の考察

5.1 三柱鳥居の起源

ここから、まずは三柱鳥居が造られた時期について考察する。三柱鳥居が確実に存在したということがわかる最古の記録について筆者が確認できたところでは宝暦13年(1763年)の愚定による『神社佛閣京都一覽』がある(愚定1763)。絵図としての初見は安永9年(1780年)刊の『都名所図会』であった(秋里1780)。それ以前について神社の伝承では享保年間(1716~1735年)に修復されたとあり、江戸時代半ばには存在していたであろうことが考えられる。

江戸時代に出版された主な地誌を見ると、興味深いことに享保年間以前の地誌類には木鳥社に関する記述が見られても、そこに三柱鳥居に関する記述は見られない⁵⁾。特に藤川玲満によれば『山州名跡志』や『山城名勝志』の2冊が『都名所図会』に大きな影響を与えたとされるが(藤川2002)、この2冊には三柱鳥居の記述が見られないことから、筆者は1711年の時点で三柱鳥居は存在せず、三柱鳥居の建立の時期は1711年から1763年の間と考える。その証拠に『神社佛閣京都一覽』を皮切りにそれ以降の地誌類に三柱鳥居が現れるようになる⁶⁾。この事から享保年間の修復というのは、三柱鳥居の修復という意味ではなく、当時荒廃していた神社を三井家が復興した際の、神域全体、もしくは元糺の池の修復という意味ではないかと考え、この時に三柱鳥居が初めて造られた蓋然性が高いと考える。

また三柱鳥居について『都名所図会』や『北斎漫画』の記述から当初は木製であったとする説が見られる⁷⁾。まず『都名所図会』安永9年(1780)初刻本で「木柱」との記述があることについては天明6年(1786)再板本で「石柱」と訂正されていることがわかる。この異同については、二書における他の異同についても見てみると事実誤認の訂正が多く見られる⁸⁾。そうした点からも初刻本に「木柱」とあったのは、そもそもから「石柱」であったもの間違いで、初刻本の間違いを再板本において訂正した可能性が高いと見られる(秋里1786)。『北斎漫画』十一編に見られる三柱鳥居が木柱と思われる点については、北斎が実際には三柱鳥居を見ていない可能性が高いことや、『琉球八景』など実際には訪れていない琉球の風景について

『琉球国志略』を元絵にして雪や富士山など想像を加えて描いた作品もあることから北斎の絵師としての想像力によるものと考えられる。こうした分析から三柱鳥居は当初より一貫して石製であり、木柱であったとの言説は誤りであると考察する。

5.2 三柱鳥居の表象はどのように生まれたか

三柱鳥居が享保年間に創案されたとして、その表象が生まれた背景に3つの可能性を想定する。一つ目は享保年間の修復に携わった三井家が持っていた思想ないし信仰を表象として反映させた可能性、二つ目に復興に当たって関わりがあったと見られる吉田神社における思想の影響、三つ目は木鳥社、元糺の池に以前から存在した信仰に関する表象を新しく三柱鳥居という形で反映させた可能性である。

一つ目の可能性についてはそれを裏付けるような史料や事例は見当たらなかった。

二つ目については、三柱鳥居が吉田神道に見られる内宮源鳥居の様式としての共通点が見られることから、その可能性を探った。特に注目したのは吉田神道において天照大神と住吉神が同神であるという秘伝が存在することである。

『都名所図会』等の地誌には木鳥社の社家の伝承について記しており、そこでは三柱鳥居ないし内側の石組みが「老人の安座する姿」を表しているとされ、また嵯峨天皇の代に大江伊時が木鳥社に参籠して、この老人から7世紀後半の唐代に張文成によって書かれた中国の小説である『遊仙窟』の読み方を伝授されたとある。この老人は木鳥明神の化身とされる。つまり木鳥社の祭神は古典を伝授する老翁であると信じられており、これは金賢旭の研究からも住吉神の性格と一致することがわかる(金2008)。もしこの老人を住吉神と同神と見なしたとすれば、住吉神は表筒男・中筒男・底筒男の三位一体の神であり、水の神であることから三柱鳥居のような表象を考え出したとしてもおかしくないだろう。

これにより三柱鳥居は享保年間に吉田神社がその秘伝に基づき創案したと思われた。しかし事はそう単純ではなかった。既に享保年間以前の地誌に老翁の伝承が見られるからである。これにより三柱鳥居の内宮源鳥居としての様式は復興に当たって吉田神社のものを参考にした可能性があるものの、三柱鳥居にこめられた思想、つまり木鳥明神を

⁵⁾ 山本泰順『洛陽名所集』9巻(1658年)、北村季吟『菟芸泥赴』(1684年)、黒川道祐『雍州府志』(1686年)、貝原益軒『京城勝覽』(1706年)、大島武好『山城名勝志』(1711年)、釈白慧『山州名跡志』(1711年)など。また享保年間に当たるが関祖衡・並河永『五畿内志』「山城志」(1734年)にも木鳥社の記述が詳しくあるものの三柱鳥居の記述は見られない。

⁶⁾ 『都名所図会』をはじめ、換書堂主人『花洛羽津根』(1863年)、上村長一『京都温故誌』(1895年)などに三柱鳥居の記述が見られる。ただし、享保年間以降のもので木鳥社の記述があっても三柱鳥居に触れられていないものも存在する。釈浄慧『山城名跡巡行志』(1754年)、橋本澄月『京都名勝一覽図会』(1880年)、石田旭山『京都名所案内圖會』(1887年)、などである。

⁷⁾ 谷田博幸など(谷田2014)。

⁸⁾ 野間光辰編の『新修京都叢書第六巻「都名所圖會」別冊 都名所圖會諸本對照表』では初刻本と河内屋板再刻本が比較対照されているが、これを参考に吉野家再板本の訂正箇所を確認すると、例えば一卷に伊豫親王について、初刻本が「崇道天皇」の御子と記されているのに対し、再板本では「桓武天皇」の御子と記されており史実としては再板本が正しい。他にも三巻で初刻本に「元山大師」とあるのが再板本で「元三大師」と誤字訂正されていたりするなど多く見られる(野間1994)。

住吉神とする考え方そのものは吉田神社が関与する以前から存在していた可能性があると考えられる。そこで三つ目の可能性を検討することにした。

5.3 可能性としての住吉神

ここでは享保年間以前より元糺の池に住吉神が意識されていた可能性があるのかを考察する。まず木鳥社の祭神が天照御魂神とされることから、天照御魂神と住吉神の関係について様々な資料によって検討したところ、両神に親和性があることがわかり、少なくとも中世の頃には天照御魂神と住吉神が同神であるという思想が近畿圏には幅広く見られていたのではないかと考えた⁹⁾。

また三柱鳥居の存する元糺の池に湧水信仰や禊の場の性格が見られる点についても『古事記』や『源氏物語』の記述、伝承資料などから住吉神との共通点が窺われる¹⁰⁾。

さらに、湧水信仰と三光信仰に密接な関係があり、湧水地点において三光石と称する「三」の表象を持つ石を祀る事例があること、『明宿集』や『高良玉垂宮神秘書』に住吉神が三光の神や翁として現れると記述されていることなどから、住吉神、三光の神、翁の三者が密接に結びついていると考えられる。

こうした各地の事例や文献に見える表象からも江戸中期以前より元糺の池に住吉神に類する神が祀られていた可能性があることが考えられた。

5.4 水辺の祭祀と「三」の表象

5.4.1 住吉神以外の水辺の祭祀に見る「三」の表象

本節では三柱鳥居のように水辺の祭祀において「三」の表象を持つ事例について取り上げる。「三」という数字が汎用的に用いられやすい数字である以上、三柱鳥居を考察するにあたってはこうした事例についてもできる限り検討しておく必要があると考えたからである。

例えば伊勢神宮外宮の「川原祓所」など水辺における禊の儀礼に際し3つの石を祀るという表象が見られる。水辺に3つの石を祀るという表象に関し、特に海辺や海中においては海龍神信仰と関係するが、海龍神と住吉神の習合が既に平安時代に見られたであろうことが『源氏物語』明石一族の物語の研究から名波弘彰によって指摘されている。(名波1992)

さらに対馬の例などからは海中の石が3つの石でなくとも3月3日に縁を持つという形で「三」の表象が見られる場合もあることがわかり、水辺の祭祀と「三」の表象との関係が深いことが窺われる。

水辺の祭祀と「三」の表象については住吉神に関するもの以外にも『八幡宇佐宮御託宣集』や『宇佐八幡宮弥勒寺

建立縁起』における八幡神の伝承にも見られることがわかっている。また翁との関係性については稲荷神にも見られる。これらはいずれも渡来系の人々によって祀られたとする神々である。こうした検討から導かれるのは、三柱鳥居に祀られた神を住吉神と限定するのが早計であり、もう少し広く渡来系の人々が祀った神、水神や海神といったものの性格を考える必要があるということである。

5.4.2 古墳時代の水辺の祭祀遺跡における「三」の表象

前項では現在目にするのできる事例や、文献に見られる事例を検証したが、こうした水辺の祭祀と「三」の表象の関係が中世を遡るのかは不明であった。そこで本項ではこうした痕跡が既に古墳時代の遺跡にも見られるということを目指したい。

事例として三重県伊賀上野市の城之越遺跡、奈良県奈良市の阪原阪戸遺跡、香川県高松市の居石遺跡といった水辺の祭祀遺跡がある¹¹⁾。これらの遺跡の分析からわかることは、古墳時代に水辺の祭祀において3つの立石や湧水点、石組み、鏡など何らかの形で「三」を意識した表象が見られることである。またこうした遺跡は渡来人との関わりが深いことや、時に地域における王権祭祀の性格を示していたりする場合が多いこともわかった。

さらにこうした遺跡の共通点として河川の合流地点における祭祀というものが考えられた。そこで様々な河川合流地点周辺の分析もおこなうことにした。例として大分県宇佐市安心院町の三女神社を中心とした地域や岐阜県高山市の三川付近の分析をおこなったところ、ともに河川合流地点において「三」、「湧水」、「白い翁」といった表象のセットが見られた。他にも糺の森など様々な河川合流地点に「三」の表象を持つ水辺の祭祀の痕跡が見られることがわかった。

こうした検証をふまえ、木鳥社における湧水信仰は古墳時代における渡来系の人々が大きく関与している蓋然性が高いのではないかと考えられる。

5.4.3 対馬における海神の特徴

5.4.1では全国の多くの事例から水辺の祭祀と「三」との関わりを示すものが多く存在することを示した。また5.4.2ではそうした事例が古墳時代の水辺の祭祀遺跡からも多く窺われ、古墳時代に渡来した人々の影響の可能性を示した。こうした多くの事例からは住吉三神以外の神との関わりを示すものも多く見られる。これらに共通する点とは何だろうか。

伴信友や北條勝貴の考察では木鳥社祭神が対馬下県直によって祀られた日神であるとされるが(伴 1813, 北條

⁹⁾ 例えば吉田兼俱著とされる「禁裏神祕御相伝切紙」には住吉神が日神であることが記されている(出村1997)。

¹⁰⁾ 奈良県奈良市勝南院(しょうなみ)町の住吉神社の社前に汐浪井という井戸があり3月3日にここから汐浪が湧き出るという伝説を残している。

¹¹⁾ 主に城之越遺跡については穂積裕昌(穂積2012)の研究によった。

1997)、住吉神が神功皇后による三韓征伐伝承において顕現した神であることから対馬との関わりを見過ごすことはできない。実はこの対馬において住吉神が他の海神と親和性の高い状況が見られることがわかっている(永留1988)。この対馬の状況をふまえたとき、水辺の祭祀に見える「三」の表象は住吉神に限定されるものではなく、もっと広く渡来系の人々が信仰する神を表象したものであるとする可能性が考えられる。半島と列島を結ぶルートの中継地としての対馬には渡来系の人々の痕跡が多く見られ、彼らの信仰が水辺における「三」の祭祀を列島にもたらしめた可能性は十分考えられる。

5.5 比較神話学の視点から見る「三」の思想

5.5.1 対馬の天道信仰と日光感精神話

表象研究を行う上で、その表象に関する文献記録が見当たらない場合には、文献や口碑に基づく伝承資料を扱うことが一つのアプローチとなり得るが、本節では比較神話学の視点から水辺の祭祀と「三」の表象の関連性を探ることとした。

前節で水辺の祭祀における「三」の思想が対馬を経由している可能性を考えた筆者は、対馬に存在する天道法師の伝承に着目した。それはこの伝承が大陸北方に多く見られる日光感精神話の類型に含まれるとされるからである。日光感精神話の日本への伝播については大陸の神話との関連から多くの神話学者が論じているが、中でも三品彰英は多くの事例を整理し、これら日光感精神話のうち、「(A) 女が日光を感じて出産するもの」、「(B) 女が日光の人態化した神人と神婚するもの」の二類型を人態的日光感精型とした。三品はこの内(A)が満蒙鮮諸族といった北方系の民族の特徴であることから日本の日光感精神話もこうした北方系の民族によって伝播したと論じている(三品1971)。

三品の研究からは対馬を経由して日本に北方系の思想が流入していることがわかる。このように比較神話学の視点から表象の分析を行うことで、日本へ、特に対馬を経由して朝鮮半島や大陸からどのような思想がもたらされているのかを探ることが可能となる。

5.5.2 デュメジルの三機能体系とその日本への伝播

前項で日光感精神話を検討したことにより大陸、特に北方との関わりが明らかとなっているが、北方系民族の神話と「三」の表象、さらに水辺の祭祀との関連について考えるとき、注目すべき学説としてジョルジュ・デュメジルの三機能体系があげられる。デュメジルは印欧語族の神話について比較構造論的な分析を行い、印欧語族内の各民族には、第一機能としての聖性、第二機能としての戦闘性、第三機能としての豊饒性の三区別の思想が見られるとした(デュメジル1987)。このいわゆる三機能体系について、デュメジルはあくまで印欧語族内に見られる思想であったが、後継の神話学者らによって他の民族の神話の分析

からもこうした三機能体系が見られることが指摘されている。中でも朝鮮半島を経由して日本にも三機能体系の思想が伝わっていることを考察した代表的な学者に吉田敦彦と大林太良がいる。

三品が日本神話と朝鮮や大陸との神話の関連について伝播論として考察したのに対し、両者はそこにデュメジルの三機能体系を援用し構造論を用いて日本神話と朝鮮や大陸との神話の関係を論じた(吉田1974, 大林1975, 1984)。両者の論に対しては反論も出されており、たしかに修正の必要性もあるだろうが日本への三機能体系の伝播を示したことは大いに参考になると思われる。比較神話学におけるこうした吉田、大林両者の説や一連の学説の系譜については平藤喜久子が詳細にまとめている(平藤2004)。

5.5.3 水界の女神や多機能的大女神に見る「三」の表象

問題はこうしたまさに「三」の表象が想定される三機能体系と水辺の祭祀との関連性、さらにそうした関連性が先述してきた三柱鳥居の表象に関わる住吉神や住吉神に親和的な神々と関連を持つのかどうかということである。

そこで三機能体系の学説において論じられる、三機能を統合する多機能的な水界大女神の存在に注目した。

デュメジルによれば、印欧語族の神話には三機能の全てと関わりを持つ大女神の存在があるとされ、特にインドのサラスヴァティー、イランのアナーヒターなどの多機能的大女神については水界と関わりがあると見られている(デュメジル1987)。またデュメジルはスキタイ系であるオセット人の「ナルト叙事詩」に登場するゼラセとサタナという母娘にも注目し、特にサタナに多機能の女神の性質が見られるとしている(平藤2004)。

水界の女神と三機能を統合する大女神の両性質を併せ持つ存在については「多機能的水界大女神」と称することができる。比較神話学のこれまでの研究成果を確認した限りでは高句麗や新羅、濟州島など朝鮮の神話においては「多機能的水界大女神」の存在は確認できないものの、始祖にかかわる水界の女神や三機能を統合する多機能的大女神の存在については確認でき、これらに「三」の表象を見ることができるとしている。

水界の女神における「三」の表象については吉田の研究を参考にしつつ、ゼラセと高句麗の始祖神話に登場する柳花が共に始祖の母であり水界の三女神とされることや、特に柳花が日光感精により始祖を産んでいることなどから、これまで論じた表象や日本の神々との関わりが指摘できる(吉田1975)。

このようにスキタイや朝鮮半島の神話において「三」の表象を持つ水界の女神の存在が見られ、それが始祖や王権と関わっているということは、前節まで見てきた日本の水辺の祭祀における「三」の表象や水の三柱神と共通するものであると考える。

多機能の女神については高句麗の神話には見られず、こ

ちらは新羅の神話を検証した。始祖の母である閼英が水界の女神であり三姓始祖の始まりに関わっていること、『三国遺事』に金庾信を救った護国三女神の伝承があることなど、新羅において「三」の表象が女神との関わりで見られることや、三機能体系の流入の可能性も考えられる。

新羅において西方から三機能体系が流入している可能性については考古学的な見地からも補強できる。由水常雄の研究によれば新羅時代のものと考えられている遺物や遺跡にはスキタイをはじめ西方世界の影響が見られることがわかっており、そうした検討から新羅が中国文化の影響よりもむしろローマ文化の影響を受けていることが判明している（由水2005）。

三姓始祖という表象にまつわる神話ということでは新羅とは別に済州島にかつて存在した耽羅国の始祖神話もある。ここでは三姓始祖の妻となった三人の女性、三神人の神話が語られており、彼女たちが始祖の母として閼英と同じであるだけでなく、柳花と同じく五穀の種をもたらしたことで共通点の見られることや、青い衣を着ていたということについて水界との関わりを指摘できる。

5.5.4 日本における多機能的水界大女神

ここまで朝鮮において始祖に関わる水界の女神や、三機能を統合する多機能的大女神の存在を論じてきたが、日本においてそうした両性質を併せ持つ多機能的水界大女神の存在について吉田や平藤が考察している。吉田はアマテラスが三機能を統合する大女神であることを論じ（吉田1974）、また一見太陽神としてのアマテラスに水との関わりが深いことを指摘し、高句麗やスキタイの神話と同じく始祖を産んだ水界の女神としての性質を論じている（吉田1999）。吉田はアマテラスの多機能の女神や水女神としての性質を、一部他の伝承を参考としつつもあくまで記紀神話に基づいて論じているが、他にも『中臣祓訓解』や『倭姫命世記』などの記述から天照大神が水の女神である可能性があることや、福岡県の門司にある和布刈神社の伝承から天照大神の荒魂が水界三女神の可能性もあることも指摘できる。天照大神の荒魂が水界の女神である可能性については、穂積の研究に基づき伊勢神宮内宮の荒祭宮の祭祀空間が城之越遺跡に類似のものであるという考古学的な見地からも補強できる（穂積2014）。

このように吉田の分析によって日本に多機能的水界大女神の存在が示唆されるようになったが、平藤はさらに進めて記紀神話の神代のみならず人代におけるムナカタ三女神や神功皇后の伝承にも多機能的水界大女神としての性格が見られると論じている（平藤2004）。

5.5.5 多機能的水界大神としての八幡神と住吉神

これまで吉田はアマテラスについて、平藤はさらに進めてムナカタ三女神や神功皇后について多機能的水界大女神としての性質を論じてきたが、これまでの表象の分析によって水界の神々に親和的な状況が見られることを考えた

き、筆者は日本における多機能的水界大女神の存在はこれらに留まらないのではないかという仮説を立てた。

それは八幡神や住吉神にも多機能的水界大女神としての性質を見出せるというものである。

八幡神については菱形池や三鉢の霊水などで水との関わりが示されている。また多機能の神としての性質については、宇佐神宮の第二殿祭神である比売大神が宗像三女神と見なされる場合があり、平藤の研究に基づけば多機能の神であるとも言えるが、筆者は八幡神の伝承そのものからも三機能体系における3つの機能をそれぞれ読みとれると考えた。

八幡神の第一機能が窺われる伝承としては宇佐八幡宮神託事件における八幡神の神託があげられる。ここから八幡神の託宣の神として、また王権の守護者としての性質が窺われる。第二機能については『八幡宇佐宮御託宣集』（以下、『託宣集』）で特に隼人征伐の際に八幡神が託宣を下し官軍を守護したことから、八幡神が国家守護にかかわる軍神としての性質を有していることが言える。第三機能については『託宣集』の記述と、柳田国男の研究から指摘できる。『託宣集』では聖武天皇が大仏造立に必要な黄金を求め唐へ使節を派遣しようとした際、無事を八幡神に祈願したところ託宣があり、陸奥国より黄金が献ぜられるに至ったことで八幡神が黄金を授けた神であることが示されている。柳田の研究では「炭焼小五郎」の話と「鍛冶の翁」の伝承の構造の類似が指摘されており、「鍛冶の翁」、つまり八幡神と炭焼小五郎が同一の存在ではないかと見られることから（柳田1925）、八幡神が第三機能に見られるような財を司る性質を有していることがわかる。

そして水界の神としてこの論考で中心的に論じてきた住吉神についても多機能的水界大女神と同じ性質を読むことができる。

住吉神の水界との結びつきについては既に論じてきたことである。住吉神がイザナギの禊の場面で水中より誕生し、また神功皇后の新羅出兵の際に海の守護神として現れたことから明らかだ。第一機能としては『古事記』仲哀天皇の段から住吉神が王権の守護者であり、また八幡神と同様、託宣の神としての性質が見られるということがあげられる。第二機能については神功皇后の新羅遠征の伝承や『住吉大社神代記』の記述から住吉神に軍神としての性質が認められる。第三機能については『古事記』仲哀天皇の段の神託の内容や『播磨国風土記』の記述から、住吉神が多くの財宝や稲の豊作を約束するような豊饒性の性質も持ち合わせていることがわかる。

また住吉神については表筒男、中筒男、底筒男と垂直構造による三柱神であることから、記紀神話において三機能体系との関わりが推察できる。次田真幸は『古事記』雄略天皇の段の天語歌の考察から海人族が「三」を神聖数とする思想を持っていたことを指摘したが（次田1984）、ここに示された上、中、下の垂直構造は記紀神話においては所々で見られる。その中に、賢木を立ててその上つ枝、

中つ枝、下つ枝の3か所に神へ奉る品を懸けるという三枝の祭祀がある。奉る品はまちまちだが、この三枝の祭祀が『日本書紀』では住吉神と関係の深い仲哀天皇紀において鏡、劍、玉の三種の神器に対応している。デュメジルがスキタイの伝承における三種の神器に三機能体系が対応しているという研究をおこなったことや吉田が日本の三種の神器にも、鏡が第一機能、劍が第二機能、玉が第三機能に対応していると考察していることをふまえると（吉田1975）、住吉神と三機能体系が密接につながっていることや、それが海人族の思想に関わりがあることが指摘できる。

ただし住吉神は女神ではない。先述したように対馬では住吉神が他の海神と親和的な状況があり、特に住吉神社で豊玉姫として祀られているケースも多いため、こうした側面がないとも言いきれないが、住吉神は基本的に男神と見なされる。こうしたケースを筆者は新たに「多機能的な水界大神」と称したい。

また住吉神と八幡神を三機能に基づいて比較したとき、両神とも特に第一機能を示す伝承が多く、第一機能の側面が強く示されていることが読み取れる。逆に第三機能に関する伝承はあまり見られない。これは平藤がムナカタ三女神を分析した際にも見られたことである。三機能を多機能統合的に有すると言ってもこうした性質を共通して持っていることも理解しておく必要があるだろう。日本における多機能を統合する神の特徴と言えるかもしれない。

以上のように日本では三機能体系における多機能的な水界大女神の存在が、女神に限らず多様な神名や信仰の形をとった水の三柱神として存在しているのではないかと考えられるのである。

6. 結論

以上、様々な角度からの表象の分析によって、木鳥社の三柱鳥居がつけられた背景として次の三つの段階が推察できる。

まず一つ目の段階として、少なくとも古墳時代までに渡来系の人々がもたらした信仰や祭祀に見られる思想の影響が背景にあったと考えられる。思想とは王権や主権の守護神としての水の三柱神を祀る思想であり、そうした神を石など何らかの形を用いて「三」の表象として示し、水辺の祭祀をおこなっていたということである。木鳥社一帯に渡来系の人々が居住していたということからも、一つ目の背景としてこうした思想の影響が浮かび上がる。

次に二つ目の段階として、一つ目の背景を元に、中世にかけて、特に近畿地方において住吉神と天照御魂神の習合が進んだことで木鳥社の祭神も住吉神と同一視されるようになったことがあげられる。住吉神が古典を伝授する「翁」として表象されたことから『遊仙窟』の伝承が生まれ三柱鳥居内の磐座と結びついたと考えられる。

そして三つ目の段階として、荒廃していた木鳥社を近世、享保年間に復興する際に、復興に関与した吉田神社に

おける吉田神道の思想、つまり天照大神と住吉神が同神であるという思想が先の二つの背景と相まって、元糺の池の祭神を表象するにあたり、あのような三柱鳥居の表象として造形されたのではないかとということである。

また不思議なことに全国各地で現代になって作られた三柱鳥居の多くが意図せずか（実際にはわからないが）、こうした思想に類した考え方を暗に含んでいる。表面上失われてしまっていたと思われる信仰や思想が何か地下水脈のように伏流し続け、現代において三柱鳥居という表象を経て湧出しているのではないかとも思われる。なぜこうした現象が起こっているのか。現代に三柱鳥居という表象が広がっていることの原因を探るとともに、こうした現代人の深層に潜んでいるものに光をあてることも今後は重要な研究となるだろう。

もう一つ、重要な点として今後の課題となるが、祭祀における「三」の表象自体はすでに縄文時代の遺跡や遺物にも見られるということである。もし縄文時代に「三」の思想があったとするならば大陸からの影響とは見なしにくい。こうした日本に古来よりあったかもしれない「三」の思想と大陸から来た「三」の思想との影響関係について分析することも今後重要なテーマとなるに違いない。

今回、三柱鳥居という個別の事象について比較研究の視点から多角的に論じることで、仮説とはいえ三柱鳥居について新たな視点を提示できたのではないかと考える。

謝 辞

修士論文の執筆が成ったのは指導教官であった内堀基光先生、内堀先生の退職後に主査を務めて下さった稲村哲也先生の有益なご指導の賜物である。ここに深く御礼を申し上げます。また古文書の解読において藤田信夫氏の協力を得、本文の校正にあたり竹内真綿子氏の協力を得た。両氏に深く謝意を表したい。さらに日頃より祭祀学研究会において共に調査研究に携わって下さっている村治笙子氏からは常に温かい励ましの言葉をいただき陰ながら支えていただいた。厚く御礼を申し上げます。他にも文中に記載しきれなかった様々な多くの方々からの協力を得て本論文を執筆することが出来た。深謝の意に堪えず、ここに重ね重ね御礼を申し上げる次第である。

引用文献

- 秋里籬島1780『都名所図会』安永9年版 ARC古典籍ポータルデータベース
 秋里籬島1786『都名所図会』天明6年再板本 書林吉野屋
 国際日本文化研究センター 都名所図会データベース
 大林太良1975『日本神話の構造』弘文堂
 大林太良1984『東アジアの王権神話 ー日本・朝鮮・琉球ー』弘文堂
 大和岩雄1993『秦氏の研究』大和書房

- 京都市埋蔵文化財研究所2002『京都市埋蔵文化財研究所
発掘調査概報 2002-15史跡木嶋坐天照御魂神社(蚕
ノ社)境内』京都市埋蔵文化財研究所
- 金賢旭2008『翁の生成——渡来文化と中世の神々』思文
閣出版
- 愚定1763『神社佛閣京都一覽(題簽)』京都府立総合資料
館所蔵・京都地誌閲覧システム
- 佐伯好郎1908「太秦(禹豆麻佐)を論ず」『歴史地理 第
十一卷第一號 百名家論集 壹百號記念』168-185三
省堂書店
- ジョルジュ・デュメジル 著・松村一男 訳1987『神々
の構造 —印欧語族三区分別イデオロギー—』国文社
- 菅田正昭2009『秦氏の秘教 シルクロードから来た謎の
渡来人』GAKKEN
- 谷田博幸2014『鳥居』河出書房新社
- 次田真幸1984『古事記(下)全訳注』講談社
- 津村勇1943『鳥居考』内外出版印刷株式會社出版部
- 出村勝明1997『吉田神道の基礎的研究』(神道史研究叢書)
臨川書店
- 永留久恵1988『海神と天神:対馬の風土と神々』白水社
- 名波弘彰1992「『源氏物語』と住吉・八幡信仰の伝承 —
明石一族の物語をめぐる—」『文藝言語研究. 文藝篇
22』182-131筑波大学文藝・言語学系
- 根岸榮隆1943『鳥居の研究』(1986年の復刻版)第一書
房(初版は厚生閣)
- 野間光辰編1994『新修京都叢書 第六卷「都名所圖會」
別冊 都名所圖會諸本對照表』臨川書店
- 伴信友1813『神名帳考証』新日本古典籍総合データベー
ス
- 平藤喜久子2004『神話学と日本の神々』弘文堂
- 藤川玲満2002「『都名所図會』『拾遺都名所図會』考」『国
文97号』29-42お茶の水女子大学国語国文学会
- 北條勝貴1997「松尾大社における市杵嶋姫命の鎮座につ
いて 主に秦氏の渡来と葛野坐月読神社・木嶋坐天照
御魂神社の創祀に関連して」『国立歴史民俗博物館研
究報告 第72集』41-80
- 穂積裕昌2012『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣
- 穂積裕昌2014「古墳時代祭祀遺跡から神宮祭祀へ —伊勢
国—」『古代文化 第66巻 3号』77-89古代学協会
- 三品彰英1971『神話と文化史 三品彰英論文集 第三巻』
平凡社
- 柳田国男1925「海南小記」1997『柳田國男全集 第三巻』
231-406筑摩書房
- 山本博1970『井戸の研究』綜芸舎
- 吉田敦彦1974『日本神話と印欧神話 構造論的分析の試
み』弘文堂
- 吉田敦彦1975(文庫版2007)『日本神話の源流』講談社
- 吉田敦彦1999『水の神話』青土社
- 由水常雄2005『ローマ文化王国—新羅 改訂新版』新潮
社